

ロビンズ Amory B. Lovins (1947-)

『ソフト・エネルギー・パス』1977年刊

70年代は、石油危機が起こり、資源や環境の有限性に対する警告が多々発せられ始めた時期であった。それは大量消費型の経済や技術のあり方に反省と転換をせまるものであったが、そうした風潮のなかにあつて、定量的なデータに裏打ちされた、ロビンズによる現状への代替案は、広く各界の関心を集めた。ロビンズは、エネルギーの供給と消費のあり方を、ハードパスとソフトパスという、互いに相容れない2つの道の選択の問題として論じている。ハードパスとは、それまでのエネルギー消費の増加傾向を外挿して未来のエネルギー需要を求め、それに見合う量のエネルギーを、多大な資本投下と再生不可能な資源の消費によって調達していこうとするものである。それに対してソフトパスでは、まずエネルギー需要の構造を使用温度や使用形態別に明らかにし、最終需要に適合的な無駄のない供給を行おうとする。そしてその供給源としては、太陽や風や植物をはじめとする再生可能なエネルギーを中核とし、ソフトパスへ移行する過渡期には、化石燃料を利用した高効率技術も一定程度許容しようとする。ハードパスが資源的あるいは資金的にゆきづまるのは必至で、また中央集権的技術体系をもたらすのに対し、ソフトパスは永続的なものであり、分散型で参加型の社会の実現が可能とされる。さらにソフトパスは、原子力を不要なものとし、核拡散を防ぐこともできるとされている。その後の、地球環境がクローズアップされる時代にあつても、このロビンズの代替案は多くの示唆を与えるものである。

(田中直)

[書誌データ]

Amory B. Lovins, *Soft Energy Paths: Toward a Durable Peace*, Friends of Earth Inc., 1977
(『ソフト・エネルギー・パス』室田泰弘・槌屋治紀訳、時事通信社、1979)

(出典: 社会学文献事典、弘文堂、1998)

[目次]

第1部 概念

第1章 エネルギー問題への新たなアプローチ

第2章 エネルギー戦略—行かなかった道?—

第2部 数値

第3章 エネルギーの将来を探索する手法

第4章 エネルギーの質

第5章 規模

第6章 ハード技術の資本コスト

第7章 移行期の技術とソフト技術の資本コスト

第8章 資本コストの比較と電力化の役割

第3部 永続的平和への道

第9章 政治社会学

第10章 価値

第11章 原子力の魔神を再び封じ込める